二葉亭における対話構造

――「あひゞき」と「浮雲」の会話文について――

藤原和好

はじめに

近代語の成立に関しては、すでに多くの研究がなされているが、成立過程におけることばの質そのものの解明は、次のような点において、国語教育学の基本的課題として新たに設定されねばならないと考える。

1、読みの技能は、黙読が可能となった段階で多様に開花すると思われるが、その黙読は、言文一致の文章が教材とされた時、はじめて可能になるのではないかという仮説（この仮説が正しいかどうかの検討も必要だが）に立つならば、近代文章語成立のありようそのものが、国語教育（読むことの教育）の展開に大きくかかわってくるのではないかという点。

2、民主主義社会の成立が、社会構成員の個性の開花と、集団思考の確立に大きくかかわっているとすると、その個性の開花と集団思考（原初的には会話）が、ことばを媒介としていかに成立したか（あるいは、しなかったか）ということの考察は、現代の言語社会、および、その学校的形態としての国語科教育における対話成立の可能性を考える際に、避けて通ることのできないものとしてあるという点。

3、1、2の点から考察を進めていった時、たとえば、近代語の成立とともに一気に偉大な文学を開花せしめた、一九世紀ロシヤにおける近代語成立のプロセスとの比較によって、日本とソビエトの国語教育の成立と展開の特性が明らかになってくるのではないかという点。

以上三つの視点から近代語の成立過程を見ようとした時、日本近代口語の成立に多大の役割を演じた二葉亭四迷のばあい、翻訳のことばと、小説のことばとの両方がとりあげられねばならない。この二つは、それぞれ異なった様相を呈しながら、近代語の成立にかかわってくると考えられるからである。

本稿は、その第一歩として、翻訳・小説の最初の作品である、「あひゞき」・「浮雲」をとりあげて、それぞれを考察しようとするものである。

1

「あひゞき」、「浮雲」を一読した時の印象では、前者は地の文が、後者は会話の文の方が生き生きしているのではないかと思われる。「あひゞき」の、明治二一年訳のものは、一般に原文に忠実な訳であるといわれている。（そしてそれは、二葉亭自身も言っていることである。）だが、後に触れるように、原文と対比してみると、必ずしもそうとばかりは言えず、とりわけ会話の部分は、かなりの

意訳がなされている。そして「あひゞき」の会話文が、何となくぎこちないことは、あるいはそのことと、何らかの関係があるのではないかと考えられる。

小説「浮雲」の研究は、さまざまな角度からなされてきている。しかし、国語教育学の視点からいえば、近代文学の出発点にあって、対話――会話が、いかなる形態と質をもって展開されているかが、さらに明らかにされねばならない問題としてある。なぜなら、すでに多くの人々が指摘しているように、対話――会話は、言語生活の基本的、かつ根本的形態であり、自己を開いて他との積極的な連帯をかちとり、それによって自己をさらに発展させるための基本的手段であるからである。大ざっぱに言って、ロジェ、ガロディが述べているような意味で「対話の価値」(サイマル出社、一九六八・二)、対話を成立させるような基盤は、近代日本社会にはなかったのではないかと思う。だが、開国以来混乱をきわめていた社会が、いちおうの平静をとり戻しつゝあった明治二〇年代から活躍を始めた二葉亭の活動には、後の文学者には見られない、開かれた性格が見い出せる。(もちろん、かれに強く影響を与えたベリンスキーに比べれば、やはり、半ば閉ざされていると言ってもよいのだが。)

2

「あひゞき」、「浮雲」は、次のような順序で発表されている。

○「浮雲」――第一篇・明二〇・六　第二篇――明二一・二　第三篇――明二二・七・八

○「あひゞき」――明二一・七・八改訳――明二九

3

本稿では、考察の都合上、ツルゲーネフの「猟人日記」の一節を翻訳した、「あひゞき」をまずとりあげたい。

「あひゞき」の文章の分析にあたっては、①明二一年訳「あひゞき」、②明二九年訳「あひゞき」、③筑摩書房、中山省三郎訳「あひゞき」、④原文(ツルゲーネフ「猟人日記」の一節(Свидание)の四つの文章を対象にして、三つのばあい(地の文、会話文、会話文の後に続き、会話文の性格を規定している地の文)に分けて考察したい。

地の文に関しては、句読点にいたるまで原文に忠実に訳されていると一船には言われている。しかし、原文に忠実であるとは、いちがいに言いにくい面がある。今、試みに、二一年訳、二九年訳、中山訳、原文の四つを比較してみると、たとえば次のようになっている。(代表的な数例のみを示す。以下同じ。)

○①春先する、面白さうな、笑ふやうなさゞめき②面白さうに笑ひさゞめくやうで③面白さうに笑いさざめく春のふるえ声④ Тре́т (ふるえ、おののき)

○①夏のゆるやかなそよぎ②柔しくそよそよとして③夏のものやわらかなささやき④ ЛЕТНИЙ (ひそひそばなし)

○①末の秋のおどおどした、うそさぶさうなお饒舌り②秋の末となると、おどおどした薄寒さうな音であるが③秋も更けた頃の、おどおどした、うす寒そうなつぶやき④ ЗАТИШЬЕ (片言)

○①頭をかきむしったやうな②頭の茸々した③高くうっそうと茂った④ ВЫСОКИЙ КУСТАРНИК (高い、よく茂った)

○①人をさみした白頭翁の聲②人を弄るやうな四十雀の聲③人をあざけるようなしじゅうからの声④ НАСМЕШЛИВЫЙ ОЧЕРЕТ (嘲笑的なしじゅうからの声)

「あひゞき」の冒頭部分に出てくる、春、夏、秋の描写を、二葉亭は次のように訳している。〃春先する、面白さうな、笑ふやうなさゞめき〃、〃夏のゆるやかなそよぎ〃、〃末の秋のおどおどした、うそさぶさうなお饒舌り〃。これらは、原文どおりに訳すと、次のようになる。〃面白そうな、笑っている春のふるえ声〃、〃夏のやわらかなひそひそばなし〃、〃晩秋の、おどおどした、寒そうな片言〃。

二葉亭は、春から秋へかけての風の移りゆきを、〃さゞめき〃、〃そよぎ〃、〃お饒舌り〃として、かれ流のすじみちをつけたのであるが、これなど、むしろ、意訳に近いものと言ってもいいのではないかと考えられる。地の文では、特に、形容のことばにおいて、こうした類の意訳がみられる。たとえば、〃頭をかきむしったような〃、〃ゆうゆうと〃、〃漸く涙をとゞめて〃、〃心細く成って来た〃などである。

ところで二九年の改訳は、初訳に比べて、かなり整理がなされており、句読点などから言えば、原文を離れてきている。たとえば、〃人を弄るやうな白頭翁の聲〃、〃大殷に〃、〃漸く落着いて〃といったような。また、原文にない、〃力なさゝうに〃という訳を削ったりして、（これら以外にも、数例を数えることができるが）むしろ、原語そのものに近づいているともいえるのである。これらのことは、八年間の、日本におけるロシヤ語学、二葉亭の語学力の進歩によるものと説明できなくはないであろうが、それよりも、翻訳への、二葉亭のかかわり方自体の中に説明を求めるべきであろうと思う。つまり、「あひゞき」の初訳は、二葉亭自身の言うように、〃先づ根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに翻訳〃（「二葉亭四迷全集」巻五、一七七ペ）したものと考えられるのである。もちろん、二葉亭は、「余が翻訳の標準」で言っているように、〃ジュコフスキーの如く、形は全く別にして、唯だ原作に含まれたる詩想を発揮する方がよい。とかうは思ったものゝ、さて自分は臆病だ、そんならと云うてこれを決行する事は出来なかった〃（「二葉亭四迷全集」巻五、一七七ペ）のである。しかし、かれは、かれ流につかんだ「あひゞき」の詩想とのかかわりにおいてのみ、優れた翻訳言語を生み出しえたのであって、原作をそのまま日本語に移したのではないのである。二九年の改訳が、文体としては整っているにもかかわらず、むしろ初訳のほうが読む者をひきつけるというのも、そこに理由を求めることができると思うのである。

しかし、会話文体となると、少し事情が違ってくる。

○①「こんなにお前さんの事を思ふのも、欲徳づくぢゃないから……おとっさんのいふことを聴けとおいひなさるけれど……わたしにはそんな事ァ出来ないワ…」②「こんなにお前さんの事を思ふのも、欲徳づくぢゃないんだから……お親父さんの言ふ事を聴けってお言ひなさるけれど、私にやそんな事あ出事ないわ……」③もう、あたし、ほかに頼る人はないと思うの、みんな、あなたがいればこそだと思うの、……あなたはお父っぁんのいうことをきけっておっしゃるのね、ヴィクトル・アレクサンドルィチ……とても、あたし、そんなことできないわ……」④ УМИРАЮ, ДОРОГОЙ ВИКТОР АЛЕКСАНДРЫЧ ほんとに、もう、私はあなたをとても愛しているの、みんな、あなたのためなの……）

○「アゝ、「ウヰクトル・アレクサンドルイチ」、どうかして一所

に居られるやうには成らないもんかね――」②「あゝ厭だ！お前さんに別れちゃ一日だって辛抱が出来ない。③「ああ、ヴィクトル・アレクサンドルウィチ、あなたがいらっしゃらなかったら、あたし、どうなるでしょうね！」④ Как это вы изволите говорить, Виктор Александрович! （あなたがいないと、わたしたちはどうなるでしょう！）

○①「そりや当坐四五日はちッとは淋しからうサ」（中略）「ちッとは淋しからうサ。」②「そりや当坐は些たあ辛からうさ。」（中略）「お前はなか〳〵しほらしい所があるからなあ」③「そりや、初めのうちはつらいだろうよ、きっと。（中略）うん、そう、そう、おまえは気立てがいい」④ Ну, конечно, первое время оно и трудно. （うん、そう、そう、お前はほんとうに気だてのいい娘だ。）

○①「なぜ此頃はさう邪慳だらう？」②「何故此頃は然う邪慳だらう？」③「前にはそんな話しぶりはしてくださらなかったわ、ヴィクトル・アレクサンドルィチ」④ Прежде вы не так говорили, Виктор Александрович. （③に同じ）

これは、はっきり意訳といっていいものになっていると思う。そのうえ、初訳と改訳の会話文を比較すると、登場人物がまるで違うのではないか、改訳のほうは、いわば、下町の江戸っ子的な人物として描かれているのではないかとすら思える。さらに次のような例でも解るように、発言内容、および発言者の様態に関しても、かなり、かれ流に作り変えているのではないかと考えられるのである。

○①トすこし鼻聲で気のなさゝうに云って②少し鼻聲で、気の無さゝうに、③彼はあっさりと、少し鼻にかかる声で言葉をついだ。④ Перефразировав （いいかげんに）

○①如何にも哀れそうで有った②心細さうに云ったが、③気がぬけたように答える④ Уныло （意気消沈して）

○①気まりわるさうに笑って②忍び音に笑ったが③そっとほほえみかけたが④ Украдкой засмеялась （かすかにほほえんだが）

①「アクリーナ」は萎れた。②アクーリナは萎れた。③アクーリナはうつ向いた。④ Поникла （うつ向いた）

○①ト何となく不平さうで②何となく不足らしい。③と怒ってでもいるかのように④ Как бы невзначай （まるでおこったかのように）

これは、どういうことを意味するのか。このように、かなりの程度に意訳せざるをえなかったこと、意訳しても、なおかつ、妙にぎこちないものになっているのはなぜなのか。いろいろなことが考えられようが、少くとも、会話の文は、地の文のようには、一人の作家の資質によっては把握しきれない広がりを持っているからだ、ということは言えるのではないかと思う。（これは「浮雲」の分析からも言える。「浮雲」のばあい、会話の文がかなり生き生きと描かれている。にもかかわらず、地の文のようには、作者自身によって把握されてはいない。処理しきれていないのである。）

4

「浮雲」の会話は（これは、分け方によって違ってくるのではあるが）、およそ四十場面ある。もっとも、厳密に言えば、会話と呼びうるもの（つまり、三者以上が、相互にからみあいながら展開しているもの）は、三場面しかなく、いずれも、本田、お政、お勢の

三人が登場する場面である。あとはすべて、対話と呼ぶべきものである。対話とはいっても、もちろん、ボルノーが言うような意味での対話（「言語と教育」一九六九・五・二五、川島書房）が成立しているような場面は、ほとんどない。友情的雰囲気とよべるようなものは、およそ欠除しているからである。

ところで、「浮雲」の対話場面は、対話者相互の関係から、一定のパターンといえるものを作り出している。以下それを列挙すると、次のとおりである。

A、文三とお勢の対話

1、かれら以外の者が介在している場面では、やりとりがなされていない。

2、話題が肝心な所までくると、かならずお勢がはぐらかしてしまう。

B、文三とお政の対話

○文三の論理が、お政（の権威）によって、つぎつぎとうちくだかれてゆく。

C、文三と本田の対話

1、比較的、対話的なやりとりが成立している。

2、文三的な在り方と本田的な在り方が、二人の激論を通して解明されるのではなく、地の文に移って、文三の独白によってのみ語られる。

Dお勢とお政の対話

○お政のもくろみは、お勢によってくつがえされ、お政は、お勢の内面にはいることができない。

E、本田、お勢、お政の会話

○三人が奇妙に同一化していく。

5

文三とお勢の対話についてまず言えるのは、かれらのやりとりは、かれら以外の者が介在している場面ではなされていないということである。かれら二人の関係は、孫兵衛、お政によって承認され、そしてお政によって否定せられるのであるが、それは、文三とお勢とのかかわり方とは無関係に、お政――文三、お政――お勢との関係において決められていくのである。そうしたすじがきの展開が、必然的に、お政、文三、お勢の相互的な話し合いの場を提供しないと言えるのであるが、もしも、お政、文三、お勢の三人の、相互的な話し合いの場を設定し得たならば、あるいは、違った様相を呈してこざるを得なかったかもしれない。（しかし、実は、三人の会話の場面を、たとえすじがきの上で設定したとしても、三人の間に、発展的な会話は成立し得なかったかもしれない。なぜなら、文三が煮つめていった段階にまで、お政、お勢の問題意識は高まっていないからである。）

さらに、（これは後に、文三とお政との関係においても触れねばならないが）お政を旧時代、文三、お勢を新時代の人物と考えると、旧時代と新時代との対決が、「浮雲」においては、お政と文三、お政とお勢といった、単線的な形態でのみなされ、それも、文三に対してはお政が、お政に対してはお勢が、一方的に自己主張をするという形で終始しているということが、次に指摘できる。「浮雲」のこの二つの主要なテーマが結局は、文三個人の中で自己完結（完結してはいないかもしれないが）していくのは、三者の立体的なからみ合い、つまり、会話の欠除にあるということもいえるのではない

かと思うのである。

文三とお勢との対話におけるもう一つのパターンは、話題がかんじんな所にまでくると、必ずお勢がはぐらかしてしまうということである。たとえば、文三が、お勢への恋心をうち明けようとすると、「アラ、月が……」、「アラ鳶が飛んでますョ」というふうにである。そして、そのパターンは、二人の関係の、決定的な場面においても現われる。お勢に絶縁宣言をした翌々日、文三は、本田が帰宅した後に、お勢がうつ伏せになって泣いているのを見た時、「示談」と、瞬間に決意する。二、三日ようすを伺った文三は、お政が外出した朝をねらってお勢に話しかけるが、決定的にはぐらかされて、ほぞをかむ。そこを二葉亭は、次のように書いている。

○「少しお嘶……お……」「今用が有ります」邪慳に袂を振り払ッて、ついと部屋を出てしまッた。その跡を眺めて文三は呆れた顔……「この期を外しては……」と心附いて起ち上がりてはみたが、まさか跡を襲って往かれもせず、萎れて二階へこそこそと帰った。「しまッた」と口へ出して後悔して後ればせに赤面。

ところで、二人の対話のうち、お勢がはぐらかすことのできなかった場面が一個所ある。それは、文三がお勢を問いつめて、絶縁宣言をする場面である。だが、ここも、文三が一方的に問いつめ、お勢は感情的に反撥するだけで、お互いのやりとりということにはなっていない。つまり、文三とお勢との間には、対話らしい対話は、実のところ、一度も成り立ってはいないのである。

6

文三とお政との関係においても、実は、対話は成立しておらず、ここでは、文三の論理が、お政によってつぎつぎにうちくだかれていくというパターンが見られる。（それは、お政の論理によってではなく、お政の権威によってであるかもしれないが。）たとえば、文三が、免職になった事をうち明ける場面では、「私はまた官員の口でも探さうかと思います」という文三に対して、「官員の口てッたッてチョクラ、チョイと有りゃアよし、無かろうもんならまた何時かのやうな憂い思いをしなくちゃアならないやァネ」と。「まさかそういう訳でもありますまいが」というと、「イイエきっとそうに違いないョ。」と。「しかしいくら免職になるのが恐いと言って私にそんな鄙劣な事は……」といえば、「できないとお言いのか……フン痩我慢をお言いでない」と追いうちをかけられ、「で……できた事なら……仕様が有りません」というと、「イエサ何とお言いだ。できた事なら仕様が有りませんと……誰れがでかした事たエ」といわれ、「どうしても働きのある人は、フフン違ッたもんだョ」と、とどめを刺されるのである。

7

文三と本田との間では、比較的、対話的なやりとりが成立している。役所から帰る時。役所復帰のとりもちをする所など。二人のやりとりには、お政やお勢がからまってくる事もあるが、その時は文三は、非難もしくは嘲笑の対象でしかなくて、会話的な場面を構成しているとは言い難いようである。

文二、本田のやりとりにおける基本的な問題は、文三的な在り方と本田的な在り方が、二人の激論をとおして明らかにされるのではなくて、かんじんな所にくると文三が激昂してしまい（もっとも、本田が最初から、勝者――優越者然として現われるからでもあるが）、二人の世界の解明は、地の文にうつる、言いかえると、文三

の独白を通してのみ語られるというパターンに終始していることである。そのへんに、二人の在り方のリアルなものも、文三の、官僚批判らしきものも、共にあいまいなままで終わってしまう原因があるように思われる。

8

ところで、文三を追いつめたお政の論理は確固としたものであるかというと、そうではなく、彼女のもくろみは、お勢によって完全にうちくだかれていく。すなわち、お政にとって、唯一の絶対の望みである、お勢を官員の嫁にやるという願望は、お勢によって、ものの見事にくつがえされるのであり、二人のやりとりの中では、お政は、お勢の内面にはいることができず、何らなすすべもないのである。

9

ところで、そうした、お政とお勢の関係は、本田が介在することによって、様相を一変する。本田とお勢、本田とお政との関係は、今までにあげた、文三――お勢、文三――お政、文三――本田、お政――お勢の、いわば二極的な関係とは違って、とりわけ、団子坂の菊見を契機に、奇妙に、同集団的なものに解消されてしまう。このことについては、はじめ、会話形態が成立しているといった、あの場面を例にとって考えてみたいと思う。

たとえば、本田が最初に園田家を訪れる場面では、本田が中心になって、お政とお勢の話をひき出すという形で、菊見の場面では、本田とお政が、課長の夫人とめいについて話している中に、お勢がはいってきて、文三とお勢の絶縁があった後、本田がやって来て、お政と本田が文三を非難している所へ、「そうしてね、まだ私の事を浮気者だなンぞって」とお勢がはいってきて、三人のやりとりが成立している。しかし会話とはいっても、そこにはなれ合いに近いものが感じられるのである。

この三人の奇妙な同一化（もっとも、お勢はしだいに離れていくのであるが。）と、文三の対話関係を対比する時、文三の孤立した状況が、いっそう鮮明になってくるのであり、文三を中心にするかぎり、「浮雲」が独白形態へとのめり込んでいかざるをえなくなるのは必然ではなかったかと考えられるのである。（この三人の最後の会話の場面では、文三が、いわば漫画的に嘲笑されているのであるが、この三人の会話場面と、文三の独白とは、作者二葉亭の中において、いわば対比的な関係にあり、もしも文三と三人との関係がどこかでかみ合えば、優れた対話――会話的場面を成立せしめうる可能性をもっているのではないかと思えるのであるが。）「浮雲」における対話をいくつかのパターンに分けて考察してみると、結局、基本的には、文三と他の世界との隔絶、文三以外の人々の同一化、そこからのお勢の遊離という構造が浮かびあがってくる。そしてそれは、二葉亭において、対話的世界が成り立とうとして成り立たないことのうつし絵でもある。つまり、対話がほんとうの意味で成りたつためには、文三のような自己への徹底的な問いつめを契機としなければならないが、同時に、お勢の側も、文三と同じ質で自己を見つめなければならない。二葉亭は、「浮雲」第三編で、そこまで煮つめながら、放棄してしまった。その結果、「浮雲」における対話的世界は、開かれかかったところで閉じてしまったのである。

10

さて、次に、地の文における文三の心理葛藤が、何をきっかけに

起こってくるかということに触れる必要があるが、これは、考察が進んでいないので、簡単に述べたい。

文三の心理葛藤の要因は、ほとんどが、対話の中にあるということはいえるのではないかと思う。その意味では、「浮雲」の対話は、重要な役割を担っていると思うのであるが、問題は、その要因が、対話構造全体から導き出されるのではなくて、部分的なものにとどまっているのではないかというところにある。たとえば、「やせ我慢ならたいていにしろ。」という本田の言葉に対する憤怒などがそれである。もっとも、お政への表面的な反撥が、お政の内面理解つまり〃叔母の心事を察するに、叔母はお勢の身の固まるのを楽しみにしていたに相違ない。〃といった所へ進むあたりは、また別の様相を呈するのであるが。

11

以上、「あひゞき」については、翻訳言語形成の在り方について、「浮雲」のばあいは、対話の構造と意味について述べたのであるが、実は、この問題は、次のような考えに導かれた時、きわめて現代的な、そして国語教育学的な意味を担ってくるのではないかということに、最後にふれたい。

詩人、長田弘は、「開かれた言葉」（一九七〇・三・一〇　筑摩書房）の中で、〃言葉を、絶えずわたしたちの存在の意味のただなかに恢復することあるいは自立させること〃（四三ぺ）と言っている。二葉亭の翻訳が、新鮮なものとして迫ってくるのは、言文一致ということだけでなく、〃言葉を、絶えず存在の意味のただ中に恢復する〃という、先駆的な営みがそこにあったからではないか、そして、そのように考えた時、二葉亭の仕事が、国語教育学の基本的課題を提出しているのではないかと考えるのが一つである。

さらに「浮雲」の対話――会話をとりあげたのは、実は、ヘルダーリンが、〃われらがひとつの対話であり〃と言い、それを受けて、ボルノーが、〃人間はその最内奥の本質において共同の話し合いによって規定されている〃と言った時と同じ問題意識に導かれたのである。そうした意味での対話が、はたして、いかなる営みの中で生まれるのかを探ってみたい、それがことばを媒介とする教育（国語教育）の中心的課題であろうと考えることが、他の一つである。だが、作業が大ざっぱで心残りの点が多く、細かい考察は、後の機会に譲りたい。

（執筆当時・広大大学院、現在、三重大学教育学部教官）